

はじめに

2009年から九州地方で取組が始まった「一貫作業システム」を核とした低コスト再造林の研究により、緩中傾斜の多い北海道や東北地方を中心に機械を用いた地拵えや下刈りスケジュールに関する技術開発が行われ、全国的には裸苗生産からコンテナ苗生産へと大きな変換が進み、コンテナ苗を育苗する上での技術も高度化されてきました。こうした流れと並行して2013年に改正された「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」に基づき、第2世代精英樹（エリートツリー）等、「成長に優れた樹木」が特定母樹として指定されました。さらに苗木生産の基盤となる採種園、採穂園の整備が進められ、「成長に優れた苗木」を用いた新たな人工林施業体系の構築が求められるようになってきています。こうした成長に優れた苗木を利用する目標の一つは、機械化が困難である急斜面において、低コストな再造林を進めるうえで「植物の力」が切り札となり、「雑草木との競争に勝ちのこる」という事です。このことを実証するために農林水産技術会議・現場ニーズ対応型研究委託プロジェクト「成長に優れた苗木を活用した施業モデルの開発」が実施され、成果の総括として「エリートツリーを活かす育苗と育林、施業モデル」や「クリーンラーチ・カラマツ類の優れた成長を活かす育苗と育林、施業モデル」を発刊しました。

このプロジェクトは森林総合研究所及び林木育種センターを中心とし、福岡県、長崎県、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、高知県、徳島県、岡山県、広島県、長野県、島根県、静岡県、北海道、九州大学、宮崎大学、鹿児島大学、岐阜大学、南栄、三井物産フォレストによる共同研究になっており、それぞれの組織から詳細な研究成果が得られています。本パンフレットではこうした研究機関による具体的な研究成果をかみ砕いて紹介しています。

構成は九州地方を中心としたスギに関する「エリートツリーの成長」、「下刈り回数の削減」、「植栽密度」、「シカ被害対策」、そして「コウヨウザン」となっており、濃淡はありますが最新の研究情報を掲載しております。

それぞれの研究成果が皆様の施業のヒントになれば、また地域の研究者の顔を知っていただき、今後も地域固有の「問題解決型研究開発」が盛り上がっていかれると思います。

森林総合研究所・研究コーディネーター 宇都木 玄

発行済みの パンフレット

